【 16 】

氏　　名	奥田太郎（おくだたろう）
学位の種類	博　士（文　学）
学位記番号	文博第 339 号
学位授与の日付	平成 18 年 1 月 23 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
研究科・専攻	文学研究科思想文化学専攻
学位論文題目	ヒューム哲学における情念と倫理
論文調査委員	（主査）助教授 水谷雅彦　教授 内井惣七　助教授 出口康夫

論文内容の要旨

本論文では，十八世紀スコットランドの哲学者デイヴィッド・ヒュームの哲学において情念と倫理がどのような位置づけにあり，どのようにかかわり合っているのかを考察・検討し，倫理における情念の積極的な役割を明らかにすることが試みられている。その試みの中で論じられる主要な争点は，ヒューム道徳論における理性と情念の位置づけ，共感の偏りを補正する一般的観点のとられ方，そうして補正された是認の情念によって徳が徳となるプロセスの委細である。こうした争点に関する検討を通じて，情念のシステムを介した是認のプロセスによる徳の形成という形で，当事者以外の第三者を巻き込んだ社交・親交の中で初めて倫理が問題化するというヒュームの洞察が示される。論者は，この洞察を支えているのはヒューム哲学における情念の内実の豊かさである，と主張する。

本論文は二部構成である。まず第一部においてヒュームの情念論が概観・祖述され，第二部において，情念論を基軸に置いたヒューム道徳哲学の再構成が試みられる。

まず第一章では，知覚論における情念の位置づけが確認される。観念と印象を知覚の基本要素とし，それらを連合原理によって組み合わせる，というヒューム知覚論の基本方針の中では，情念は，通常理解されているような単なる受動的衝動ではなく，知覚の一種として取り扱われることになる。知覚論の中で情念は，反省の印象に分類される単純印象であるとされる。それゆえ，ヒュームの情念論では基本的に，情念の生起する因果的条件の解明とその類似性の指摘が行なわれることになる。

それを踏まえて第二章では，『人間本性論』における情念論の探究の詳細が整理・検討される。ここでは，ヒュームが具体的にどのような情念をどのような原理を用いて論じているのか，が確認される。とりわけヒュームが熱心に論じた，誇りと卑下，および，愛と憎しみの間接情念と，希望と恐れの直接情念について中心的に取り扱われている。その中で，情念のもつダイナミズムが，さまざまな原理を用いて説明されていることが明らかにされる。主要な原理としては，観念と印象の二重関係に基づく連合原理，共感原理，比較原理，合成原理などが挙げられる。これらの原理とそれによって動く諸々の情念は，第二部での議論で重要な役割を果たすことになる。とりわけ，対人的な情念としての間接情念は，個人の内面に閉じ込められた衝動的な情念とは異なる，社交の場へと開かれた情念のあり方を示している，と理解されうる。

第一部での議論に基づき，第二部最初の章である第三章では，ヒューム哲学における理性と情念の関係が論じられる。これは，情念と倫理について考察するための土台となる作業である。ここでは，まず，行為の動因について理性と情念がどのような位置づけにあるのかが，「理性は，情念の奴隷であり，ただそれだけであるべきである」という有名な「奴隷メタファー」の妥当性を問うことによって考察される。考察の結果，行為の動因として理性は無力であり，情念と理性の闘争ですら実は激しい情念と穏やかな情念の衝突に他ならないことが示され，「奴隷メタファー」の妥当性が明らかにされる。同時に，論証的推論と因果的推論とによって情念に道を示す重要な役割を理性が担っていることも示される。そうした議論を踏まえて，道徳論における理性と情念の関係へと話題が移され，道徳的識別は理性のみに由来するのか，情念のみに由来する

のか，それとも，いくつかの原理の複合的作用に由来するのか，という三者択一の問いに至る。検討の結果，理性と情念は複合的に作用して道徳的識別を成り立たせる，という結論が出されることになる。では，道徳的識別において理性は実際にはどのように働いていると考えられるのか。ヒュームは，道徳的識別の核をなすのは情念（感情）であると考えるので，この問いに応えるためには，「ある性格がそれを道徳的に善いあるいは悪いと称せしめる感じや感情を引き起こすのは，その性格がわれわれの特殊な利害と無関係に一般的に考慮される場合に限られる」という条件の掘り下げた検討が必要となる。

そこで，第四章では，特定の性格を自らの利害とは無関係に一般的に考慮するための観点が問われることとなる。ヒュームの哲学において，「特定の性格を考慮する」ということは，共感の原理を通じて他者の情念や快苦を自らの胸中に再現するということに他ならない。さらにそれを「自らの利害とは無関係に一般的に」行なうためには，原理的に偏りを抱え込む共感を補正するものが必要となる。ヒュームはそうした役割を担うものとして「一般的観点」を提示している。そこでまず，まずヒュームの考える一般的観点がどのようなものかが明らかにされる。そして，われわれはどのようにしてその観点をとるのか，および，なぜその観点をとるのかが問われることになる。その際争点となるのは，われわれがその観点をとるのは意識的な努力によるのか無意識的な習慣によるのかである。まずは，われわれが一般的観点をどのようにしてとるのかについて，「無意識的習慣説」対「意識的努力説」という対立軸を手がかりに考察される。そして，対象認識での一般的観点と道徳的識別での一般的観点とが異なった性質をもつということを示すことによって，「意識的努力説」に暫定的な軍配を上げることになる。さらに，われわれが一般的観点をとるのはなぜかについては，そうすることの有用性の他に，ヒュームが情念論で示した愛の情念に関する人間本性のメカニズムにその根拠を求めうる，と結論される。これら二つの結論から，一般的観点は，人間本性によってそれをとるよう促されながらも，誰の観点がそれに当たるのか，誰もがその観点をとっているのかをめぐって他者との交渉が必要となる，という弱い意味での「人為的」観点である，ということが示される。このような一般的観点によって補正された共感を通じて，われわれは道徳感情すなわち是認と否認の情念を抱くことになる。そして，そうした情念が向かうのは，道徳的な規則や義務そのものではなくて，それを背後で支える徳と悪徳である。

したがって，第五章では，ヒュームが道徳論の中で，人びとの行為よりむしろ性格を問題として徳と悪徳を論じていることに着目し，まず，ヒュームが徳についてどのように考えていたかを確認する。主要な論点として，行為の有徳性は動機に由来すること，徳は賞賛や是認にかかわること，行為を有徳にする最初の有徳な動機は自然な動機や原理であることの三点が採り上げられ，それぞれ検討が加えられる。続いて，ヒュームの挙げる徳の四つの源泉（(1)当人にとって直接快適，(2)当人にとって有用，(3)他者にとって直接快適，(4)他者にとって有用）が確認され，これらの源泉のタイプ別に，特定の性格特性を徳たらしめる是認がどのようにして成立するのかについて，共感原理を軸として詳細に分析が施される。その際には，そこでやりとりされる情念が注目され，誇りと卑下，愛と憎しみといった間接情念の重要性が，是認のプロセスの解明の中で明らかにされることになる。こうした作業を通じて，是認のプロセスが「情念のシステム」によって支えられていることが示され，ネットワークを形成する情念のシステムの中で徳が彫琢されていく様子が描き出される。これにより，ヒュームが人為的徳についてはとりたてて一般的観点に言及していないことに対する整合的な理解が可能となる。

ただし，情念のシステムによる徳の解明は，形式的な要素が強く，それだけでは具体的にどのような性質を備えたものが徳であるのかはまったく明らかになっていない。そこで，第六章では，情念のシステムがもつ快苦の伝達回路としての側面に注目し，徳に対する情念と快苦の関係について考察する。まず，道徳的徳と自然的能力の違いが単なる言葉の問題にすぎないとするヒュームの見解を検討し，道徳的／自然的の区別は，情念のシステムを介した是認のプロセスの有無によって判定される，と結論される。さらに，道徳的な善と自然的な善の関係について，ハチスンの道徳感覚論とヒュームの議論とを対比し，両者の領域を完全に分けるハチスンの見解とは異なり，ヒュームは，自然的な善を道徳的な善の経験的基盤と捉え，両者を是認のプロセスを介してつないでいる，ということが確認される。その上で，性格特性と個々の行為をつなぐ因果的な流れ，および，快の経験の時間的な流れという観点から，自然的徳と人為的徳の違いが吟味される。その結果，是認のプロセスに乗る前の性格特性の快のあり方に徳に関する自然的／人為的の区別が依存することが示される。そして，人為的徳となる正義の性格特性（ヒュームの言い回しで言えば，有徳な動機）がどのように形成されるのかについても解明されている。この章での議論を通じて，ヒューム哲学における徳は，その中身が拡張される可能性を原理的に保証されたものである，ということが明らかになる。

最後に，第七章では，第六章で拡張の可能性を示唆された人為的徳の拡張の限界が問われる。検討の対象となるのは，ヒュームが「修道院の徳」と称して批判した宗教的な徳である。現行の徳目について基本的にそれほど批判的ではないと思われるヒュームが，宗教的な徳に関しては強硬な態度で批判していることは有名である。もし宗教的な徳が「自然でない」という理由で徳とみなされえないとしても，まだそれが人為的徳である可能性は残されている。宗教的な徳が人為的な徳ではないと言うためには，本物の徳と偽物の徳とを区別する基準が問われなければならない。そこでまず，宗教的な徳を成り立たせている宗教そのものの原因と帰結について，情念論の枠組みを援用しながら分析する。その際には，研究者たちの間で比較的扱いが低い小論「迷信と熱狂について」に注目する。この小論での議論の基礎には『人間本性論』でのヒュームの哲学的理論が援用されており，宗教を分析的に理解するのに適しているからである。この分析を踏まえて，宗教的な徳と人為的徳の線引き基準が検討されることになる。その結果，その基準は，もたらされる公共的な利益の有無という経験的なものであることが示される。

以上の議論を経て，結論の章では，本論文の倫理学上の意義が，現代英米のメタ倫理学における「ヒューム主義」との対比で示される。現代メタ倫理学の「ヒューム主義」理論では，「信念／欲求」の心理モデルがヒューム由来のものとして用いられている。そこで語られる「欲求」は，行為を動機づける心理的状態であり，反事実的条件文によって記述されうるものである。しかし，このような「欲求」は，一定の形式を与えられた関数的項目へと還元され，その内実を剝奪されているようにも思われる。これはヒュームの考える情念とはまったく異質のものであり，この両者の違いは，それぞれの理論において倫理における社交の重要性を捉え得ているか否かに由来する，と考えられる。ヒュームの哲学では，情念のシステムを介した是認の構造の中に徳を位置づけることで，第三者を含んだ社交が倫理の成立を規定するということが示されており，これが新たな思考の補助線となって，より豊かな倫理学の可能性を開くだろう，という見通しが示されることになる。

論文審査の結果の要旨

本論文は，ヒュームの主著『人間本性論』第二巻における情念論を倫理の考察に向けてポイントを絞って整理し，それに基づいて同書第三巻における道徳論を再構成して，ヒューム哲学における情念と倫理の緊密な関係を明らかにすることを主たる作業としている。そして，その検討は，多くの倫理学が情念に与えてきた「不合理で克服されるべきもの」という位置づけを見直し，倫理における情念の積極的な役割を明確に提示するという意図をもったものである。

序論において示されているように，従来のヒューム研究は『人間本性論』第一巻の知性論もしくは第三巻の道徳論を中心とするものが多く，第二巻の情念論はほとんど注目されていなかったが，近年，知性論と道徳論をつなぐ重要な位置づけが情念論に与えられるようになってきている。本論文は，そうした研究動向を踏まえ，ヒュームの情念に関する議論を丁寧に整理している。さらに，情念と倫理のかかわりに関する探究を主軸としながら，フランシス・ハチスンの道徳感覚論，ヒュームの宗教論や現代メタ倫理学の「ヒューム主義」についても論じられており，本論文の全体構成は，目配りの利いたものとなっている。本論文は，まず，その基本的方向性の明確さと議論の射程の広がりについて，評価されるべきものである。

第一部では，ヒュームの知覚論における情念の位置づけが確認され，単なる受動的な衝動に回収されない情念のあり方がヒュームのテキストに即して提示されている。情念が，個々人の内面に生じる衝動としての側面のみならず，他者との親交を通じた自己と他者の間の反響によって生起し多様な形で展開する開放的な側面をも有する，ということを独自の哲学的原理に基づいて統一的に示そうとした点に，ヒューム情念論の最大の意義があるという論者の着眼は，当該問題に対するきわめて重要な洞察をもたらすものである。

第三章では，「理性は情念の奴隷であり，ただそれだけであるべきである」という有名な一節（奴隷メタファー）を手がかりに，ヒューム哲学における理性と情念について，主として行為の動因という観点から論じられている。同じく有名な「指の負傷」フレーズ，および，穏やかな情念についての議論などを丁寧に検討し，ヒュームの言う「理性に反する」ということの意味を明らかにして「奴隷メタファー」の理論的裏づけを行なっていることは，現代メタ倫理学の内在主義と外在主義の論争にも関係する意義深い成果である。

共感の偏りを補正する一般的観点を論じた第四章，および，是認の情念によって徳が成立するプロセスを論じた第五章は，ヒュームの情念論から道徳論を再構成することを目的とする本論文の核となる内容を有している。これらの章では，ヒュー

ム自身がその道徳論において詳細には述べていない部分を本論文第一部で明確にされた理論的な道具立てに基づき掘り下げるという挑戦的な作業が試みられており，まずそのこと自体に大きな意義を認めることができる。とりわけ論者は，第五章において，ヒューム道徳哲学における徳の重要性に着目しながら，激しい間接情念である愛の情念が，三者以上の間での共感を通じた情念と快のやりとり（情念のシステム）を通じて，穏やかな間接情念である是認の情念（すなわち道徳感情）へと変化するプロセスを詳細に描き出し，図解によって視覚的な明確化を試みている。この作業は，「特定個人の特殊な利害と無関係に一般的に考慮される場合に生じる情念」としての道徳感情という従来の理解をさらに推し進めるものとして評価することができる。

第六章は，ハチスンの道徳感覚論と対照させながら，ヒューム哲学における道徳的な善と自然的な善のむすびつきを検討し，そのむすびつきが，情念のシステムを介した是認のプロセスによって可能になっていることを明らかにしている。さらに論者は，自然的／人為的というヒュームの用いる徳の二分法の内実を，行為，動機，性格特性の間の関係を手がかりに解明しようと試みている。これらの作業もまた，ヒューム自身の論究が十分でない部分を補足しようとする取り組みであり，ヒューム解釈に一定の方向を示すという点でも有意義である。

第七章は，認識論の視点から検討されることの多いヒュームの宗教論を情念論と道徳論の視点から検討し，ヒュームによって語られる「真なる宗教」の内実に迫ろうとする試みである。『自然宗教に関する対話』などの代表的な宗教関連著作に比べて脚光を浴びることの少ない「迷信と熱狂について」という小論を採り上げ，『人間本性論』の理論的枠組みを用いて詳細に分析を施した論者の着想は，注目に値する。

本論文は，その結論に示されているように，ヒューム自身が簡潔にしか述べていない重要な理論的主張を掘り下げるヒューム解釈上の挑戦的試みであると同時に，現代メタ倫理学における「欲求」概念の物足りなさを見据えて，第三者を巻き込んだ社交を基礎とする新たな情念の倫理学を展望するという野心的な試みでもあり，十分評価に値する。しかし，その議論の中で，ヒューム道徳哲学における徳の重要性を強調するあまり，従来のヒューム論の中心であった規則や行為への目配りが幾分疎かにされてしまっている点，是認のプロセスによる徳の成立についてもう少し踏み込んだ論述が求められる点などいくつかの課題を残していることは否めないところである。論者が今後さらに精進を重ね，それらの課題に取り組み，本論文が提起した問題をさらに深く展開することを期待する。

以上，審査したところにより，本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお，2005年10月27日，調査委員３名が論文内容とそれに関連した事柄について試問した結果，合格と認めた。